

戦前期婦人雑誌のなかの「職業婦人」

——『主婦之友』、『婦人倶楽部』、『婦人公論』の比較から——

富山県立大学 濱貴子

1 目的

この報告の目的は、戦前期の婦人雑誌に登場する働く女性のうち「職業婦人」としてカテゴライズされた女性の職種とその登場頻度、ならびに登場する記事ジャンルの傾向を主要読者層の異なる複数の婦人雑誌の比較を通じて計量的に明らかにすることである。

2 方法

そこで、データとして『主婦之友』、『婦人倶楽部』、『婦人公論』の創刊から日中戦争直前の1937年8月号までの記事を用いた。まず、目的にあげた第一の点について明らかにするために、目次のタイトルに女性の就いている具体的職業が登場する記事もしくは職業を持つ著名女性が登場する記事を抽出し、具体的職業を集計した。それらの記事を「職業をもつ著名女性」が登場した記事と、タイトルに具体職にくわえてさらに抽象化された職業カテゴリである「職業婦人」と「内職・副業」という言葉が記された記事、それ以外の「具体職のみ」記された記事の4つに分類し、該当するカテゴリに具体的職業も分類し集計した。さらに、上記の抽出方法ではどの婦人雑誌においても本報告の主な分析対象である「職業婦人」に該当するケースが少なかつたため、補足的に目次におけるタイトルに「職業婦人」とのみ記され具体的職業が記されていない記事を抽出し、本文を読み具体的職業を集計した。

次に、目的にあげた第二の点について明らかにするために、上で抽出したタイトルに「職業婦人」と記された記事(以下、「職業婦人」記事とする)について、記事タイトルからそれぞれの記事を論説、手記、レポート、実用、創作(漫画・小説)の5つのジャンルに整理した。

3 結果

分析の結果、『主婦之友』では96職種1539ケースの具体的職業が登場し、そのうちの41職種205ケースが「職業婦人」にカテゴライズされ登場していた。『婦人倶楽部』では88職種2103ケースの具体的職業が登場し、そのうちの51職種306ケースが「職業婦人」として登場していた。『婦人公論』では、58職種1328ケースの具体的職業が登場し、そのうちの41職種138ケースが「職業婦人」として登場していた。3誌ともに農林漁業や鉱業、工業や家事労働に従事する女性ならびに芸娼妓は「職業婦人」とは区別されていた一方で、商業、交通業、公務自由業に従事し、官庁や会社、学校、百貨店・商店、飲食店に勤める女性が典型的な「職業婦人」とみなされていた。くわえて『主婦之友』では看護婦が、『婦人倶楽部』では理髪・結髪・美容師が、『婦人公論』では記者・著述家・文芸家が少なくない割合で「職業婦人」としてカテゴライズされていた。また、「職業婦人」記事のジャンルで割合が高かったのは、『主婦之友』では実用(40.7%)であり、『婦人倶楽部』では手記であり(47.1%)、『婦人公論』では論説(35.1%)であった。

4 結論

以上から、戦前期の婦人雑誌に登場する働く女性のうち「職業婦人」として登場する女性の割合は一様に低く、官庁や会社、学校、百貨店・商店、飲食店に勤める女性が典型的な「職業婦人」とみなされていた。また雑誌により「職業婦人」が高い割合で登場する記事ジャンルに違いがみられた。

文献

木村涼子, 2010, 『「主婦」の誕生——婦人雑誌と女性たちの近代』吉川弘文館。